



デジモンテイマーズ

第13話

ギルモン包囲司令！

大いなる災厄の始まり

第三稿

脚本／小中千昭

Animation Play by Chiak J. Konaka

2001／03／20

登場人物

松田 啓人「タカト」(10)
李 健良「リーくん／ジェンリヤ」(10)
牧野 留姫「ルキ」(10)

ギルモン
テリアモン
レナモン
クルモン
インプモン

加藤 樹莉(10) 体育教師・森
浅沼奈美(26) 北川 健太(10)
塩田 博和(10)

李 小春(07)……………リーの妹 / 李 鎮宇(40)……………リーの父
李麻由美(42)……………リーの母 / 李 嘉玲(15)……………リーの姉
李 連杰(17)……………リーの兄(台詞無)

山木満雄(32)……………ネット管制室長
鳳 麗花(26)……………チーフ・オペレーター
小野寺 恵(23)……………オペレーター

【仮想円卓会議】

声 1 (官房長官)
声 2 (科技省次官／女性)
声 3 (七話登場の監査役)
声 4 (政務次官／地方議員)

地下の技術者達

M I B

ダークリザモン 「一話のデジモンに表現が似そうなので変更」
ミヒラモン (影のみ)

前話リプライズ

N 「留姫とレナモンは、互いをパートナーだと、改めて認め合った。人とデジモンの関係、それは一体どんな意味を成しているのか、どんな未来を作り出すのか、まだ誰にも判らない——」

サブタイトル

淀橋市場外観/夜

車通りの少なくなった小滝橋通り。
ガランとした青果市場の中からスパークが迸る。

同/内

タカト「ギルモン！ カードスラッシュ！ メタルガルルモン！」

カードをDアークにスラッシュするタカト。

瞬間、光がメタルガルルモンの姿となり——、ダイクリザモンと戦うギルモンへ届く。

ギルモン「わわっ、す、凄いパワーが来たぞっ！ うおおおっ——
ギルモン、新たに得た力で身を震わせ——」

ギルモン「コキュートスブレスニ」

タカト「おしっ！ 勝利だギルモン！ あいつをロードしてもっともつと強くなつて進化するんだ！」

ギルモン「ぐおおおおッ！」

と！ その時、四方からサーチライトが暗い市場内に集中照射される。

タカト「（怯え）な、何……？」

市場俯瞰

上空には識別票無き漆黒のヘリが二機、上空からサ

「チライトを照らしている。

無線声「(ノイズ混じり/徹底的にオフ) Target founded. Keep
on standing by, alpha bravo Charlie.」

市場内

ギルモン「タカト、どうしよう。戦う?」

タカト「まずいかも……。逃げた方が、いいのかも……」

ギルモン「どうして逃げる? ギルモンたち、悪い事してる?」

タカト「そうじゃ、ないけど……」

激しい緊張がタカトをぐっしりと汗で濡らし、動
悸が酷くなっている。

ダークリザモン「オレハココデイキル! オレヲシンカサセロ」

タカトに襲いかかる敵デジモン。

ギルモン、立ち向かおうとすると――

バシユ! バシユバシユ!

催涙弾が打ち込まれた!

ギルモン「ゴホゴホ。ぐえっ。タ、タカトお」

タカト「ギルモン! ギルモンどこ?」

煙の中で、タカト、手さぐりでギルモンを探す。

大きな影が見えた。

タカト「ギルモン!」

ダークリザモン「がああッ」

タカト「二(声も出ない)」

しゅるるるる――

ドオオン! 倒れ込むダークリザモン。

身体にはワイヤーガンの楔が何本も刺さっている。

タカト「!」

怯えて震え出しているタカト。

ギルモン「タカト!」

タカトの側に来るギルモン。

まだ煙で視界は晴れない。

その中に響く、カチンカチンという音。

タカト「(震えて)こ、怖い……。ぼく……」

煙の中に立つ男の姿——、山木。

山木「デジモンテイマー、そういうんだってね」

タカト「(はっ)」

山木「カードで遊んでる分には罪も無い。しかし——、いつまでも危ない遊びをしていたら、お父さんお母さんに叱られる」

タカト「遊び……、じゃ、ない……(自信無く)」

山木「じゃあ何してんだよ、子どものくせに」

タカト「こっちの、世界に——、危ないデジモンが……」

山木「そこにいる君のパートナーはじゃあ何なのさ。同じデジモンじゃないか」

タカト「デジモンは違うよ！ デジモンは、僕が……」

ワイヤーで捕縛されたダークリザモンを、防疫服の男達が回収していく。

タカト「——どうするの？」

山木「本当はその赤い奴を連れていってもいいんだ」

ハツとなつて、デジモンを庇おうと前に立つタカト。

山木「——(真顔)ふうん……、ただの怖がりじゃない、か」

山木、背を向けて去っていく。

煙、晴れつつあり、サーチライトが消えていく。

暗闇の中に残されるタカトとデジモン——。

デジモン・ホーム

タカト、穴蔵に寝そべるデジモンに

タカト「じゃあお休み、デジモン……。また明日ね」

行くこうとするタカトに

デジモン「タカト」

タカト「(振り向き)何」

デジモン「タカトは、デジモンにもっともっと強くなって欲しいんだよね。もっと進化して欲しいんだよね」

タカト「——そ、そうだけど……」

デジモン「デジモン、強くなるよ。進化したい！ デジモン、どんな風になるのかな」

タカト「変わる……」

フラッシュ

巨大化し、野生の目で咆哮するグラウモン。
慄然と見つめているタカト――。

ギルモン・ホーム

タカト「変わるなんて――、嫌だ……」

ギルモン「えっ？ どうして？ 進化して変わって欲しいんでし

よ？ タカト、それが嬉しいんでしょ？」

タカト「とにかく、嫌なんだ！」

飛び出していくタカト。

ギルモン「（小首傾げ）わかんないよ、タカト……」

中央公園

闇雲に駆けていくタカト。

その背後に聳える――、新都庁。

中層階は不自然に明るい。

窓に近づくと、5フロア程の間は、窓のすぐ側に壁
があり、内側は見えない事が判る。

更にその奥には――

ネット管理局管制室

ヒュプノスの全方位スクリーン。

オペレーター座のアームが交錯。

麗花「ヒュプノス、ワイルド・ワンを探知」

恵「（インカムに）山木室長？」

山木の声「（無線）ザコは放っておいていい」

恵「――はあ……」

恵、インカムに手を添え

恵 「れ？ 何なのこれ……」

麗 花「どうしたのよ」

恵 「トレーサーの反応が変なんです！。ワイルド・ワンを追わないで、ルートの周囲をぐるぐる循環してて」

麗 花「（ゴーグル・インカムを外し）どういう事よ——ん」

コンソール座の下をヒョコヒョコと歩く者を見る。

クルモン「（ぶつぶつ）わー、なんだかとっても広いでくるー」

いろんな声が聞こえてきて楽しいでくるー」

恵 「……、かわいーっ」

クルモン「（見上げて）くるるー？」

エレベータ内

地下十三階で止まる。ドアが開くと——

ネット管理局／R&Dセンター

都庁舎群全体の地下に広がる、大センター。

壁際には直径5mはあろうかという光ファイバー束。室内は多くのパーティションに切られている。

一際明るい奥の一角。そこに向かって歩く山木。

ネット管理局／管制センター

呆然と立っている恵。

恵 「あれー、どこ行っちゃったんだろ……」

麗 花「誰が持ってきたの？ あんなぬいぐるみ」

恵 「ぬいぐるみ？ そうですかねえ？」

麗 花「流行ってるでしょ、喋る奴」

恵 「そうだけど……、勝手に歩いて入ってくるかなー……」

ネット管理局／R&Dセンター

捕らえられたダークリザモンが、半透明のガラスに

覆われたケージの中でもがいている。

ケージ内部は、デジタル・フィールドの粒子が充満。技術者1「この粒子は、ネットから物質化、リアライゼーションする場合に発生する模様」

技術者はマイクに声で記録しながら検査をしている。スピーカーからくぐもったダークリザモンの声。

ダークリザモン「オレヲハナセ、オレハコノセカイデイクル」

山木「ふん。どこで生きようと、所詮お前達は人間が産み出したプログラム。老人達が夢見た人工知性。まがいものしかない。そんなお前たちがリアル・ワールドに出てくるなど、アクシデントでしかないんだ」

技術者2「この——、デジモン、ですか。身体を構成しているのは確かに物質、疑似蛋白質です。しかしその分子の結合は極めて不確かで危うい……」

山木「まがいものとは、そういうものです」

山木、パネルのゲージをぐいつ、と上げる。

バチバチバチッ！ ケージ内にスパークが走る。

もがくデジモン。

技術者1「量子化ノイズ増大。ケージ内の質量が急激に低下」

デジモン「グオオオツ、ワレラガカミヨ、コノセカイヲヌリカエ

テクレ……」

技術者1「（眩き）神……？」

技術者2「人間の事、だるう？ ああ……、消えていく——」

デジモンの姿、量子化ノイズにかき消えていく。

山木「今のデータは全て記録してあるんですね」

技術者1「はい」

山木「なら、もうこんな野良犬、駆除して下さい」

技術者2「駆除……？ ああ、メタファイザーを使えと。はい」
技術者2、パネル脇の、臨設コンソールを操作。
きゅううううん。地下全体に響く音。

量子ノイズ化した、ケージ内の データ を、青い渦が巻き込んでいく。

山木「ワイルド・ワン、野生の人工知性。全て駆除してやる、もうすぐ」

カチン、と閉じられるジツポ。

淀橋小学校 / 翌日午前

「おはよう」と口々にして登校してくる生徒たち。
正門前では奈美がつまらなそうな顔で立っている。

タカト「先生おはようございます」

奈美「え？ ああ、おはようタカトくん。変なもの、持ってきてないわよね」

タカト、ぎくつとして腰のDアークを握る。

タカト「へへ変なものって……」

奈美「オモチャとかカードとか……。お願いだからそんなもの持ってきて欲しくないわ。余計な事でいちいち怒りたくないものあたし」

タカト「（作り笑い）そ、そうですね。ぼく、心配かけたりしませんから」

玄関に行こうとして振り向くタカト。

タカト「——奈美先生？」

奈美「え？」

タカト「——なんで先生になったんですか？」

奈美「——就職先として安定している」

タカト「……」

奈美「——と思ったからだけど、失敗したかなーとか思ってる」

タカト「——僕もそう思います」

ギョツとなつてタカトを見入る奈美。

タカト「……（『ぼく、なんて事言っちゃったんだ』）」

タカト、下駄箱に向かって駆けていく。

奈美「——（小声）何よ……。いいじゃないあたしだって……。爪を噛む奈美。」

そこに体育教師の森、来る。

森教諭「あ、な、奈美先生おはようございます。はは。持ち物検査、ご苦労様ですね」

奈美「あ、森先生代わつてくれます？ お手洗い行きたいんで森教諭「えっ？ あっ、ちよっ……」」

五年二組教室

タカト、入ってくると、教室後部で、ヒロカズ、ケ
ンタ達が談笑していた。

タカト「おはよ」

笑っていたヒロカズ、固い顔になって。

ヒロカズ「ああ。おはよ」

ケンタ「……」

気まずい雰囲気。

タカト、自席へ俯いて向かう。

それを心配そうに見つめる樹莉。

国語の授業中。

黒板に武者小路実篤の詩を書いている奈美。

ぼうつとそれを見つめているタカト。

ノートにはギルモンの絵。それがグラウモンに進化
し——、更に巨大な姿になっているのを描こうとし
て、グシャグシャに潰してしまった。

と、隣の席の子が机をトントンと叩いて、小さな紙
片を手渡す。

タカト「え……？」

タカト、可愛く折り畳まれた紙を広げる。

タカト「——（くすっ）」

妙に可愛く描かれたギルモン。変な服まで着せられ
ている。

『ギルモンちゃんかわいいね』

タカト、向こうの席を見る。

悪戯っぽく笑ってこちらを見ていた樹莉、前を向い
て——、手踊りの犬で『わん』。

少し気分が晴れるタカト。

自分が描いた禍々しい姿の巨大なギルモン（究極体）
と、樹莉が描いた絵が並んでいる。
それを見つめるタカト——。

リー家／ジェンの部屋

テリアモン、ジェンのパソコンに向かい、トラックボールをくるくる回している。

テリアモン「（鼻唄）」

画面はデジモンウェブ。

テリアモン「みんな元気かなー」

と、画面の隅にイレギュラーなウィンドウが開き、見知らぬデジモンのシルエットと、デジモン文字のデータが急速にスクロールしていく。

テリアモン「ほあ？　こんなデジモン、いたっけ？」

バン！　ドアを開ける小春。

テリアモン「ぎくうっ！」

硬直するテリアモン。

小春「テリアモン？」

テリアモン、わなわなしながら、パタリと、キーボードに突っ伏す。

小春「勝手にジェン兄ちゃんの機械触ったら怒られるぞー」

小春、やってきてテリアモンを抱き上げる。

小春「ジェン兄ちゃんがこんなところにテリアモン置きっぱなしにしてるからいけないんだよねっ」

「にゅ〜」という顔のテリアモン。

小春「さっ、これからテリアモンは赤ちゃんになるでしゅよー」
きゅうううっ！と抱きしめる小春。

テリアモン「……（汗）」

画面内の不気味なデジモンの影、消える。

恐竜公園

学校帰りの生徒達が、公園外の道を歩いていく。

タカト、公園前に来ると、ヒロカズ達が公園内のブランコに乗っていた。

タカト、逡巡するが、中へ。

タカト「……やあ」

ヒロカズ「……おお」

ケンタ「……何？」

タカト「……（言い出せず）」

と、そこに樹莉、やってきて

樹莉「ね、今日はカードで、遊ばないの？」

ケンタ「デジモン……」

ヒロカズ「いいじゃん、別に。しなきゃいけない訳じゃない」

タカト「——あの、僕……」

ヒロカズ「——なんかよ、デジモンなんて子どもの遊びだって気

分になつてきたんだ。な、ケンタ」

ケンタ「え？ う、うん……」

樹莉「子どもの遊び……？（当惑）」

言つたヒロカズも、嫌な事を口にしてしまった想い。

ヒロカズ「……」

タカト「（目を外し）遊びだしたら、嫌いになっちゃえば、もうそんな事なくていいんだ、よね……」

樹莉「え？——あたし——、よく判らない。でも——、タカト君が友だちになった、ギルモンちゃんがデジモンだったら、あたしデジモンってとっても好きだと思う」

ヒロカズ「ああ？ 何言つてんの？ ケンタ、俺ン家でゲームやる」

ケンタ「うん」

二人、気まずくタカトの前から去っていく。

タカト「——遊びじゃ、ないよ……」

タカト、Dアークをぎゅっと握る。

樹莉「——ごめん。あたし、変な事言つたみたい」

タカト「——そうじゃないよ。ただ——」

樹莉「ねっ今日もギルモンちゃんと遊ぶの？」

タカト「——遊びじゃないんだって！」

樹莉「……」

タカト、言つた瞬間に後悔したが——

タカト「——じゃ、じゃあ、か加藤さん僕帰る」

ぎくしゃくした動きで駆けていくタカト。

樹 莉「……（寂しそう）」

暗い室内（山木の部屋）」

虚空にランダムに並ぶウィンドウ（前後に距離差があり、被写界深度差でボケている）。

机に向かってしている者、車の中のもの、ゴルフをしながら、秘書が差し出したCCDカメラに向かっている者……。為政者、役人たち。Weagamによる会議。

声 1「——今、ネットワークが危険なものだと国民に印象づけられる事は絶対に避けねばならない」

声 2「ネットワーク疑似生命体物質化現象、リアライゼーションの事例は現在全ての報道を検閲し、差し止めています」
山 木「それも、ヒュプノス、ネット監視システムの恩恵だという事をお忘れなく」

声 3「そのヒュプノス自体の存在も絶対に知られてはならない」
声 4「そもそも誰が作ったんだ、そのデジモンとかいうのは」

イメージノディスプレイ画面

1980年代のマイコン画面。

モノクロドット、未だ怪物としてのアイコンを持たない、マトリックスが、命を持っているかの様に蠢いている。「参考/蛋白質構造図」

声 2「1980年代に、世界各国の若い研究者達がオープン・ソース・プロジェクトとして始めた実験でした。ただそのプロジェクトは既に凍結され——」

MSX程度の解像度に、デジモンのモノクロドット絵がピコピコ動いている。

声 2「今は、その時のキャラクターが、子ども達の人気になっているだけ、だった筈です。本来の疑似生命体は、定められたローカル・エリア内でのみ生きられ、それも消去された筈です」

山木の部屋 / テレビ会議

山木「しかし、それらが野生となつてネットワーク内を我が物顔で走り回り、そればかりかこのリアル・ワールドに肉体化してきている。どんなに危険な事かお判りですか？」

黙る一同。

山木「デジタルモンスター——、デジモンの本能は極めて単純です。相手をデータとしてロードして自らのデータを増大させる。そこは野生動物そのものだと言える。

しかし、野生動物には寿命があるが、ネットを野生化しているデジモン共は、パケットとしてのライフタイム、寿命を無限化している。勝手に進化したのです。人が作ったもの。だから、人が始末しなくてはならない」

やや間。

声 1「——山木室長。君が申請している——」

山木「シャツガイ、です」

声 1「それを用いたら、ネットワークにどういう影響が出る」

山木「極く短い期間ですが、混乱します。しかし、ネット障害など日常茶飯事に起こっており、殆どのユーザが認識する事はありません」

声 3「それは言わば、我が日本が全世界に向けて兵器を放つ様なものではないか。いくらヴァーチャルな空間とは言え問題は大きい」

山木「シャツガイの存在を他国が知る事は絶対にありません」

声 4「どうだろうな。あくまで試験を行う。そういう建前なら、我々の公式な承認を得る必要も無い」

声 1「（安堵）そう、解釈出来るな。山木室長」

山木「——判りました。試験を行います」

次々と消えていくウインドウ。

山木「——腰抜け共が」

新宿中央公園 / 夕刻

大きな複合じゃんぐるじむ+滑り台の上で、並んで

座っているタカトとギルモン。

小さい子どもたちが、ギルモンの尻尾と遊んでいる。

タカト「——ねえギルモン」

ギルモン「ギル？（何？）」

タカト「グラウモンに進化した時の事、覚えてる？」

ギルモン「うん、覚えているよ」

タカト「あの時の君、怖かった……」

ギルモン「僕は僕だよ」

タカト「でも——、僕の事なんて、全然言う事を聞いてくれなかつた。そういう時の君の目って——、僕……（怖い）」

ギルモン「（タカトをじっと見つめ）タカト、僕たちは友だちタカト——」

ギルモン「友だち、って、僕よく判んない。でも、きっと僕が今、タカトをタカトだって思っている気持ちがそうなんだって思う」

タカト「——（びっくり）ギルモン……」

ギルモン「何」

タカト「すごいな……、だって、初めて僕達が出会った時って、ギルモンは赤ちゃんみたいだったんだよ。それなのに、すごく考えがしっかりしてて、はつきり喋ってて」

ギルモン「へへっ。タカトと一緒にいるからさ」

タカト「——僕は——、全然進化してないや……」

ギルモン「タカト、進化——っ！」

ばっ、と立ち上がるタカト。

タカト「進化する！ 僕だってええええ！」

晴々とした顔のタカト。

ギルモン「タカトモーン」

タカト「（笑い）違うでしょっ」

笑い合う二人。

タカト「ギルモン！ 僕、君を信じていなかった。御免ね！」

ギルモン「なあに？ 何で謝る？ タカト」

タカト「ギルモンが進化するの、やっぱり何か理由があるんだ。

僕は怖がってばかり。そんな僕、嫌なんだ！」

ギルモン「——」

見つめ合うタカトとギルモン。

その向こう――

都庁舎の最上部、茸アンテナ群に、クレーンで、一
際巨大な尖塔が横に突き出す様に設置されている。

ネット管理局／管制センター

作業着の男達が大勢、コンソールの増設作業をして
いる。

恵 「（アーム座から）あーっ、すみませんそこ、あんまし
じらないで下さい。調整がシビアなんでえ」

作業員「あ、すみません」

恵 「何が始まるんですかねえ……」

麗花「――（冷たく）さあ」

麗花、ゴーグルをずらし、鏡に自分の顔を映す。

マスクラを気にしている。

麗花「（嘆息）」

西新宿／地下鉄出口

疲れた顔で、地上へ出てくるリーの父親、鎮宇（ジ
ヤンユー）。

マンシヨンの玄関前に来ると――、すっ、と黒い服
の男が陰から現れる。

鎮宇「じ」

男 「リ・チンウさん、ですな」

鎮宇「リー・ジャンユー。そう読みます」

男 「日本の漢字ではそうは読まない。まあいい。あなたが若
い頃は楽しかったんでしょねえ、ネットワークはまだ
ごく小さなものでしかなかった。そこでならどんな遊び
だって許された」

鎮宇「誰なんです、あなたは」

男 「あなたの、昔の遊び仲間を探してるんです。あなたがた
の誰かが、まだ大人になりきっていないらしい」

鎮宇「どういう、意味です」

男「まあおいおい判るでしょう」

男、すつと鎮宇の脇を抜けて通りへ。

鎮宇「ちよつと待ってくれっ!」

振り向くと――、男の入れ違いにジェンが帰ってき

たところ。手にはX-Zoneの紙袋。

ジェン「(怯え)おとう、さん……?」

鎮宇「ジェンリヤ……」

ハツとなつてジェン、振り向く。

ジェン「今の人って――」

ぶおん! 黒塗りのプレジデントが走り抜ける。

二人「……」

リー家/玄関

赤ちゃん服を着せられたテリアモン、を抱き抱えた
小春がお迎え。

小春「おかえりなさい! ほらテリアモン、おかえりーって」

テリアモン「(ひくひく)」

ジェン「た、ただいま(ひくひく)」

神楽坂裏町

旧家の並ぶ町――。

留姫「(オフ)この前――、ハーピモンを倒した時――、どう
してロードしなかったの……?」

レナモン「(オフ)判らない……。でも、私には今、留姫がいる」

牧野(秦)邸

庭の軒下で、膝を抱えて座っている留姫。

レナモンはその奥、軒下の暗がり立っている。

留姫「ロードしなきゃ、もっと進化――」

レナモン「そう、デジモンは他のデジモンをロードする事でより

強く進化していくもの……。だけど、人間のパートナーを得たデジモンは、そうする必要はもうない気がした」

留 姫「でも、それじゃ強くは進化出来ない……」

レナモン「進化とは、ただ強くなる為だけのものではない。そう
う思っているよ、今は」

留 姫「そう、だね……（微笑）」

レナモン「留姫？」

留 姫「——いいの、なんでもない。ただ——、ちょっと嬉しか
ただだけ……。あたしがデジモンにこんな気持ち持っ
たんで、前は思ってもみなかった……。そう言えば——、
あの子、今どうしてるんだろ……」

想いを馳せる留姫。

南新宿/デッキ

人通りの少ない端の方。

クルモンが手すりに乗っかって、NT の尖塔を見
つめている。クルモンには、電離層の波が見えてい
るらしい。

クルモン「なんか変でくるー。クルモンが前にいたところと、同
じ空気になつてきたでくるー」

「ごん。足蹴にされて落ちるクルモン。
クルモン「わー」

手すりに立つインプモン。

インプモン「たそがれてんじゃねーよこのガキがよ！ 何がくる
くるくるーだザケンじゃねっつの！」

クルモン「何するんでくるー。ひどいじゃないですかー」

インプモン「ムカツツクんだよお前みてえに人間に可愛がられ
てニコニコくるくる何モンなんだてめえはデジモンじゃ
ねーのかよ悔しかったら俺を倒してロードして進化して
みるよ出来ねえのかよ！」

クルモン「クルモン、進化なんかしなさいですー」

インプモン「あん？ 何言ってるんだこいつ。やっぱりどっか足り
ねえと思っただけど、どうしようもないね、サイアクだね、

オシマイだね、デジモンとしちゃ」

クルモン「くるー……」

インプモン「しょうがねえな、じゃあこのインプモン様がお前をロードしてやるよ。お前なんかロードしたってちつとも強くなんか進化できやしないだろうけど、ま、塵も積もれば山となるかもしんねえしよ」

キラつと光るインプモンの目。

クルモン「(怯え)くるるる」

ネット管理局/管制センター

メイン・コンソール脇に設置された、大きな可搬式のラック。2Uサイズの機器が詰まっている。それらから、キャノン端子のケーブルが無数に繋がれている。

技術者の一人、メイン・パワーを入れる。

ラックの中の小型液晶モニタに波形が映る。

技術者「シャツガイ、起動しました」

アーム座の麗花、自己のHMDに映る波形を見て

麗花「！何これ！ ネットワークに逆流を起こしている！」

山木「(無線/オフ)いいんだ。こないだ捕獲したデジモンのデータを餌に、食いついたワイルド・ワンのデータを完全分解する。それがシャツガイだ」

ゴオオオオオオ！

突如、ヒュプノスの全方位スクリーンが青い渦を巻き始めた。

恵「(慄然)——なんか——、すごい……」

地下13階/R&Dセンター

広大な円形壁面の光ファイバーの束、凄まじい勢いの光が循環し始めている。

ギルモン・ホーム

寝そべって進化フェイズのカードを見ているタカト。
タカト「このカード使ったら、サクツと進化出来たりして……。

ね？ ギルモン」

声がしないので、身を起こすタカト。

ギルモン、眉を顰め、じっと耳を澄ましている。

タカト「？ ギルモン……」

と、軽く室内が揺れた。

タカト「あ、地震……」

ギルモンの目、ギラギラと光り始めている。

ギルモン「——来る……」

リーの家ノキッチン

夕餉が始まっている。

小春「いただきまーす！」

玄関が開いて、姉の嘉玲が帰ってくる。

嘉玲「ただいま。なーんだまた駅弁大会？」

麻由美(母)「しょうがないじゃない残業入っちゃったんだから」

鎮宇「お前どっちにする。釜飯か？ 蛤弁当か？」

嘉玲「どっちでもいい。あ、やつば釜飯」

鎮宇「(苦笑) そうだと思った」

ジェン「……お父さん……」

鎮宇「……(小声) 今は家族の食事の時間だぞ、ジェンリヤ」

ジェン「お父さんが若い時に研究してたのって——『デジモ』」

鎮宇「食事の時にする話ではない」

ジェン「ごめんなさい……(俯く)」

ゴトン。背後の部屋から音。

ジェン「？……(ハッ)」

ジェンの部屋

ジェン「テリアモン！(慄然)」

テリアモン、狂ったように窓を叩いている。

